

34 宮沖に見る地名と人名の勝手な読み解き

下の地図は、大井宮沖と呼ばれる区域を土地台帳をもとに小字単位に赤線を入れたものです。ここは、足守川と日近川の氾濫による土砂が堆積して出来上った沖積平野、つまり「沖」と呼ばれる由縁ですが、やはり土地柄にふさわしい地名が見えます。

大森は宮山の森続きで、その昔、大井森と言われた旧跡です。中村は、中洲の陸地化が進んだ中州村。その内の高まりが岡屋敷。猪ノ鼻は自然堤防の突端で、イノシシの鼻形と見立てられたところ。また、婦計、流田は足守川と日近川の狭間で堆積が進まなかった低湿地です。溝手は足守川の水を西から東へ送る人工水路です。この盆地は、東南方向の鍛冶山に向かって低いので、日近川でなく、足守川の水を利用せざるを得ません。同じ理由で、日近川の水は馬場、上カシヤ、下カシヤを潤します。高田は、名のとおり宮山続きの隆起地で、縄文時代の「オオモリ遺跡」があります。惣堂、宮地、神ノ木は神社との関連をうかがわせません。桜は、鉄の生産地以外にはないという地名で、大名持命を祀る大井神社の境外摂社、桜神社がありました。(吉備人出版「岡山県の製鉄小字地名」)



この地は、沖と呼ばれるとおり洪水による水田の埋没と復旧が繰り返された所です。庄の条理制区割りも、度重なる水害に根が尽きたのか、洪水により変形された自然流路に従った形に納まると言う次第です。

埋没と復旧の繰り返しはこの地の人々にとってはこの上ない災難でありました。そこで、コレラの木野山様と同じように、神様のお出ましとなる訳です。

図中三カ所の●は地神、▲は神社が祀られた場所です。足守川、日近川の氾濫流が行く手を狭められ、大森と上カシヤを結ぶ線ぐらいまで水に浸かることはしばしばあった事でしょう。こ

の二地点は、東西の出っ張り部で氾濫のたびに土地の形状が変わるといふ有様でした。そこで、ここへ地神と神社が祀られたと考えることもできます。



大森稲荷跡の地神石と手水鉢



上カシヤの地神石と対岸のコウジンダ(白丸)

地神は、文字通り土地の神様ということですが、この場合は堅牢地神ということでしょう。同じ趣旨で、二つの流れが突き当たる西町屋敷の遠藤の魚屋さん前の岸辺にも建てられました。

神社は、大森には稲荷神社、惣堂の方は、コウジンダと呼ばれていますので荒神が祀られていたのでしょうか。どちらも大井神社に合祀されたようです。(コウジンダの所有は、大正4年1月に巖神社から大井神社へ移され、同年9月には栄町・八軒町10人の共有地となっています。)

そもそも、これらの神々がこの地に祀られた事が氾濫から土地を守り、稔り多きを願う心根によるものであったと考えますと、明治期に合祀々々の大合唱のもと、場違いの大井宮山に祀り上げられ、今やその由緒も忘れ去られようとしていることは誠に気の毒な事です。

ところで、大森の稲荷神社跡地に興味深いものがあります。一つは、地神石に金神と刻まれていること。二つめは、神社の敷地が足守川の水に洗われる上流側に、地元、大森治路右衛門ら6名の寄進による社地流失防止の地覆石が据え付けられていること。

三つめは、横長の自然石に船形が彫り込まれた手水鉢です。明治4年春、雲騰吉政さんの寄進です。問題は船形彫り込みと雲騰の意味。雲騰致雨露結為霜。即ち、雲が湧き起これば雨となり、露が結んで霜と為る、これは自然のなすところで太古から変らぬ天地宇宙の営み、という意味からとったもののでしょうか？ 船と湧き立つ雲。果たしてどういう人物だったのか… まんざらタダ者ではなさそう。

船といえば、惣堂橋の袂に慶応3年(1867)に建てられた燈籠に廻船屋利四郎という名前



雲騰吉政さん寄進の舟形手水鉢

が刻まれています。そこで、この二人の関係の謎解きを試みました。つまり、利四郎さんは上方から九州、北陸あたりまで自前の船で物産の交易を行う船稼ぎ(海運業の経営主)。吉政さんは一年のほとんどを海で過ごす加子(船員)というのでしょうか。北前船に乗っていたかな？ひょっとして利四郎さんの船に乗っていたかもしれません。

それにしても海上安全は金比羅… ですが。



遠藤鮮魚店前の地神石